コ17-17

諸國奇譚集

明治四十二年七月五日發

259
438

發兌書肆　三重縣桑名　弘報館

學理應用

世界奇術大全

（郵便切手又ハ振替貯金ナレバ郵税共弐拾四錢）

代價郵税共爲替ニテ弐拾弐錢

天地は廣し、宇宙は大なり、豈に秘術奇法の驚き且つ怪むべき者是れあらざらんや、今や奇々怪々幻妙不思議の秘術を一々學理に照し、纂錄して世界奇術大全と名け發賣する事となれり、諸氏之を繙かば益する處多大なるは今更喋々する迄もあるまい。

掲載目錄

人間百歳迄生きる法●十日間に如何黑き人にても白色となる法●痘痕を簡易に去る法●老人でも白髮とならぬ法●子供無き人も子供設くる法●必ず子の出來ぬ法●胎内の子供の男女を知る法●女の外心あるを見顯法●婦人悋氣を止むる法●他人の年齡を正確に知る法●人の生死を豫め知る法●終身眼をわずらわぬ法●鳥目を治する法●我思ふ事を人に夢見させる法●百日百夜眠らずとも氣力衰へぬ術●飯を食せず歩行する法●鷄卵を根付にする法●縄なくして人を縛する法●鼠を退去せしむる法●竹に及物なくして彫刻する法●歌かる●圍碁に必ず負けぬ法●道たや八々に必ず負けぬ法●驚天動地催眠術に迷ひ磁石なくして方角を知る法●暦なくして毎月朔日の十二支を知る法●素人にて容易に思ふ者を染める法●墨なくして文字を書く法●狐狸の付きたるを去る法●牛乳の良否を知る法●龜に綠毛を生ず法●新らしき石に青苔を自由に生せしむる法●習字速成術●インキノ汚點を取る法●油紙に字を書く法●澁柿を甘くする法●硝子瓶の栓を容易に拔く法●小豆を早く煮る法●大なる目を小にする法●口臭きを治す法●物覺へ惡しき人を忘れさせぬ法●髮の毛を多くする法●かき色にする法●ハゲ頭に毛を生ず法●乳を澤山出す法●必ず日に燒けぬ法●顏の色を櫻き損ひの字を拔法等●まだ〳〵澤山記載してあるが何れも空想虛理に傾く學者輩が机上の空論でなく實際に適合したる者なれば、諸子是れを繙かば蓋し益する事尠なからず矣。

發賣元　三重縣桑名矢田磧　弘報館

振替貯金口座番號東京第壹六九貳八番

特52
388

はしがき

今の世の中に化物とか怪物とか、又不思議とか云ふ者は一つもない筈である、併し遺憾な事にはまだ不思議がる人が充分あるやうです、一體化物とか、怪物が出ると云ふのは、要するに觀察力の淺薄に原因するのでよく正體を調べて見ると、幽靈と思ふたのが、キの穗であつたり、狐火と思ふたのが遠くの火であつたりするのである、又一つには迷信が手傳をするし、又繪畫なぞで大入道なり、天狗なりを見、又れときばなしで聞いたりするから、實際そんな者があると思へば神經で見えるのである、いざ我輩は、迷信者を覺醒せしめんが爲め、本書を發行したる譯であるから、本書を一讀した以上は、今後不思議者が世の中にあると思はず、其正體を見破るやうにせねばならぬと

著者申す

目錄

八幡の籔……三
川を登る石……四
越後の七不思議……六
（奥水、火の井戸、八房の梅、三度栗、逆さ竹、即身佛、燃ゆる土）
動く地藏……九
露無山の由來……十
蛇の祟り……十一
鏡岩の傳說……十二
油を嘗める女……十三
怪物の足跡……十四
化物屋敷……十五
出血したる櫟……十六
狐火……十七
幽靈の御むかい……十八
山男……十八
山女……十九
龍宮城……二十
姨捨山の由來……二十
人魚……廿一
猫化……廿一
怪火……廿三
狸の惡戯……廿四
馬の化……廿五
胡麻と豌豆を喰はぬ……廿六
墓の不思議……廿七
ガヲロ淵の不思議……廿九
獺の化物……三十

●八幡の籔

下總の八幡村に八幡知らずと云ふ籔がある事は誰も知らぬ者はあるまい、一體此籔は餘程不思議な籔で、誰でも此籔の中へ一度迷ひ込んだが最後、再び出る事が出來ぬと云ひ傳へた不思議な籔がある、或る時某と云ふ武士が此說を聞いて、そんな馬鹿な事がある者かと、一人で探檢に出掛け、だん〳〵奥へ進んで行くと一ッの細き流れ川へ出た、此小川の水は如何にも心地よく澄んで居て、明かに水底が見るばかりでなく、丁度琴でも奏する樣な美い音して流れて居る、其內に一人の官女の如き者が出てきて申すには、貴方は此川を渡るとよろしくないから渡らないで速に御歸り遊ばせと告げ、其儘何處ともなく立去つて仕舞つた、武士は何に糞と思ひながら竹籔の中を透して彼方を見ると、奥の方に美麗なる宮殿があつて嚴然と空に聳へて居る、此處まで來てむざ〳〵歸つてたまる者かと川を渡つて行つた、すると向ふの方に白く曝らされた人骨が堆かく積んである、さては此處が惡魔の宮殿で、あの堆かく積まれたの

は、必ず昔から此籔の中で惡魔の手に斃れた者の骸骨に相違ないと、急に怖氣づいて最早や奥を究める勇氣も失せてうろうろして居ると、又何處ともなくより白髪の老人が顯れ、此處へ來る者は一人たりとも、生を完うして歸りし者はないが汝だけは命を助けてやると、首筋をつかんで籔の外へなげ出されたと云ふ有名な傳說がある、現今は大いに開墾せられて僅かに一町四方位の小籔となつて、最早誰一人迷ふ者はないが、昔し籔の廣かつた頃は屢々迷つた人があつたそうだ、是れも惡魔の宮殿と云ふのは昔の事であるから、山賊の如き者が澤山棲んで居たかも知れん、又白骨が澤山あつたとすれば夫れは一種の有毒瓦斯が噴出して其處を通つた鳥や獸又は人などが、有毒瓦斯に接して死んだ骨が溜たのであろう、夫れを開化せぬ時は、色々な事を言ひ傳へた者である、

●川を登る石

加賀の白山の麓を流れる川がある、其川の中に周圍二丈余もある大きな石が年々少しづゝ川の上の方へ登てゆく、三十年來目印をつけ試した人の話を聞くと、五六十間も川の上へ登つて行たと云ふから其人に好く聞いて見ると、昔此白山に登ろうとした、一人の僧があつたが如何にしても登る事が出來ぬ、だから其腑甲斐なさに此川に身を投げて死んだのが石に化したと云ふて居る、なる程年々川上へ二丈余もある石が登つて行くと聞いては不思議を知つて居る人はよいが、知らぬ人は不思議に思ふであろう、知らぬ人の爲めに話すとしよう、

凡て此の川に限らず、水勢の急なる川にある小さき石は下へ流れるが、大なる石は川の上へ登る者である、なぜなれば大きな石が川の中にあると上より流れて來る水が大きな石に當つて、大きな石の前の土砂を水勢で堀る者である、さうすると川下より川上の方が反つて低くなるから、さうすると其石は低い方へ、ごろりと轉がる、だから幾分か川上の方へ登るではないか、斯く如く度々繰返すから自然と石が川の上へ登つて行くのだ、だから石が大きければ大きい程其力が強いから好く登るのである、無智の者は餘程不

思議に思ふであろう、

世の中には斯の如き不思議は隨分あるに違ひない、が人が怜悧になれば昔不思議と思つた事も何んでもないやうになるから、能く注意して驚かず其原因を探ぐるやうにしたらよかろう、

化物の正體見たり枯尾花、で原因を知らずしてつまらぬ事に驚いて居る馬鹿者が多いから困る、

●越後の七不思議

越後には昔より七不思議と云ふ事を傳へて居る、のは諸君御承知であろう、日本には七不思議と云ふ者が諸所にあるが、越後の七不思議は有名な者であるから次に是を說明する事としよう、

一臭水

是は越後蒲原郡柄縣村と云ふ處から湧出する水で、此水は錆色の泥水である、此水で物を洗つたり、口を嗽ぎますと總ての臭氣が取れてしまうと云ふて、尊崇して居るのであるが今日文明の世に、是れを不思議と思ふ者もあるまいが知らぬ人の爲めに話さう、斯の如き水は越後でなくても鐵氣と硫黃氣のある水なれば何處でも同じ事だ、

二火の井戸

越後と云ふ國は石油の澤山出る國である事は諸君御承知であろう、が昔のまだ石油なる者を知らない頃に地下一尺四方に深く堀り下げると其穴から常に火を噴き出したから、土地の者は其火で煮物をした者だ、なる程昔の人が驚いたのも無理はない、井戸から水の出るのは普通であるが、火を噴き出すのですから、知らぬ他國の人が見たなら嘸ぞ驚いたも無理はない、是れは地下に石油が澤山あるから常に石油瓦斯が噴出するから、火を持つて行けば穴の中の瓦斯に火が移るのである、今日大都會に住する人は瓦斯を知り居らるゝならん、夫れと同じ理由であるが昔の人が驚いたのも無理はない、

三八房の梅

是れは蒲原郡小島村にある、不思議と云ふのは此梅の實は誠に小粒ではあるが中央に一個あつて周圍に七個併んで花の如き形に實が八個宛屹度實るのであるから不思議としてあるのであるが、斯の如き種類の梅は越後に限らず世間にはいくら

もある、此梅は、昔親鸞上人が塩干の種を捨てゝ置かれたのだと傳へて居るが今日にて是れを信ずる馬鹿者は一人もあるまい。

四　三度栗

此栗は一年に三度も實を結ぶと云ふ不思議な栗である、是れも蒲原郡安田村孝順寺と云ふ處にある、是れも昔親鸞上人が燒栗を捨てられたのが芽を出したのだと云ふて不思議がつた者だ、いくら親鸞上人でも燒いた栗が芽を出す筈がない、昔の人は一寸珍らしい者があると、直に誰が植えたとか、蒔いたとか云ふて騒いた者だ。

五逆さ竹

是れも親鸞上人が自分の杖を地に植えられたら夫れから芽が出たのだと云い傳へて居た者だが惜い事には今は枯れて了つた、其枯幹は同じく蒲原郡島屋村淨光寺に保存してあるそうだから、物好きな人は見せて貰ふがよい、此竹に限らず、隨分世間には下向きに葉や枝の出て居る者も澤山あるから少しも不思議な事はない筈だ。

六即身佛

是れは三島郡野積にあるので最上寺と云ふ寺にある、即ちミイラで此ミイラは最上寺の開祖弘智法因だと云ふ事である、今では是れを不思議と云ふよりも珍らしいと云ふ方が至當であろう、まだ依然として腐らずに殘つて居ると云ふから見たき人は見に行くがよい、骨と皮とで固まつて居るそうだ。

七燃ゆる土

是れは三島郡柿崎村から出るのです、諸君は燃ゆる石を存じですかと聞いたならば馬鹿らしい石炭が燃えるじやないかと直に云はれるでしよう、今でこそ石が燃ゆると云ふと誰も不思議に思ふ人は一人もありますまい、石が燃ゆるのに然も石油の多く產する越後の石油交りの泥土が燃ゆるのが何が不思議でしよう、寧ろ當り前ではないか世の中が開けぬ内はつまらぬ者を見て不思議に思つていたのである七不思議はまだ日本に澤山あるが、皆斯の如き者許りである。

●動く地藏

安藝の竹原町の東方に西ノ峠と云ふ山が

ある、此山に登ると西は竹原町の人家を瞰下し、東は高崎町を見る事が出來る、今より五六百年前に高崎町の人々が此山の頂に地藏尊を高崎町の方を向けて安置したそうだ、すると不思議な事には其夜の内に竹原町の方へ向き變つた、高崎町の人々は驚いて、直に又高崎町の方へ向け直した、所が翌日になると又竹原町の方に向いて居られる、高崎町の人々は又向け直すと、又翌日には竹原町の方へ向ひて居られる、何遍向け直しても翌日には竹原町の方へ向ひて居られるから高崎町の人々も是れは地藏尊が竹原町の方を御好みになるのだと強いて向け直さなくなりて、今に竹原町の方に向ひて居られるそうだ、尤も竹原町は山水秀麗にして偉人、小早川隆景、賴山陽などの輩出した町だそうな。

露無山の由來

美作の國に露無山だの姿見橋などがある其由來を一寸話そう、姿見橋は昔後醍醐天皇が惡漢尊氏の爲めに隱岐へ移らせられし時。御自分の御姿が如何なり果てしかと、御姿を映せられたるにより、姿見橋と傳へて居る、此川は泉川と云ふて、此川の源を尋ねると一つの小山がある、此山こそ此日御宿とせられた處であるが近習の人朝起きて見たるに、他の山には露が千萬粒あれど此山のみ露一滴もなかりしとて露無山と名づけたそうだ。

●蛇の崇り

信濃小縣郡東上田村に曾右衛門と云ふ人があつた、此家の裏は山續きで其山の麓に小さな池があつた、其池の近傍には昔から一足の大きな蛇が住んで居るので、夫れを代々辨財天と崇め、小さき祠を立て、毎日御飯を焚いて供へてあつた、すると蛇も馴れた者、出て來ては食ふて居た、斯くて何事もなかつたが、寛政十年曾右衛門は商用にて上州高崎へ行き、留守は悴の豐吉に任せて行つた處、或日のこと豐吉は草を刈り取つて居た處誤つて蛇の尾を截り落した、豐吉はびつくりしたが、其晩から豐吉は大熱を發して人には見にぬが、豐吉の眼には丸太のやうな蛇がきて、身體中を、締らるゝと云ふて悶き苦んで居るから、家内の者は心配して醫師よ藥よと手當をして見たが一向効

能がないから祈禱までしたが何の驗もないのみか今は一死を待つより仕方がない程になつたから、早速父曾右衛門に知せる事にした、曾右衛門は此話を聞いて一時は驚いたが、智慧のある人だから、急ぎ用事を片付けて家に歸り、豊吉の病氣を見もせず、直に池の祠の前へ行き、祖父以來我が家の鎮守として汝等の如き虫類を辨財天などゝ祭り置いて日々飯まで喰せて置くのに、それを冥加の事とも思はずうろ〳〵のたくり廻はつて尾を切られ、恨んで祟りを爲すなどゝは惡ひ奴と

祠を打破して蛇を見付出して、一打に打ち殺し、皮を削ぎ、切りこまざいて酒の肴にして喰つて了まつた、此大膽な振舞に人々舌を捲いて驚いたが、曾右衛門氣にも留めず、我は打殺したのに此通り尾を切つた位に病みつくとは何事だと、はげましてやつたら病氣は一晩に元の通りに復したと云ふ事だ、豊吉に限らず神經質の弱い男は何んでも心配して病氣を起すのだ注意したがよかろう。

●鏡岩の傳說

伊勢度會郡神路山の麓に流れて居る五十鈴川に沼ふて、溯て行くと、水岩に激し飛沫雨の如く眞に絶景なる處に出づ、其處に見上る許りの苔むす大岩が屹然として聳ゐて居るそうだ、これこそ鏡岩といつて、昔一人の美妃があつて、朝な夕なこの前で化粧したと云ふ、今でも苔こそむしてあるが、苔を取ると恰も鏡のやうに顔が寫るそうだ。

●油を嘗める女

昔、品川に紅屋と云ふ宿屋があつた、或る日一人の旅人此家に止宿した、折惡しく其夜は大暴風になつて、其音の凄じさに寢られもせず、種々考へて居た、スルト不思議や障子がスラリと開いた、思はずドキとして考へて居ると、何人か入つて來る樣子、恐々ながら薄目を開いて見るに宵にお給仕に出た宿屋の女、今頃用のある筈がない、此女手癖が惡く枕元の金子でも探しにきたのであろう、わざと空寢をして居ると、此女枕元の金子には手をも觸れず寢息を考へ、行燈を引寄せて又寢息を考へ、好く寢入て居ると思ひ安心して片頬にニッコと笑を含み、行燈の中へ首を差入れ、チュー〳〵とばかり

油を吸ひ始めた、此有樣を見た旅人大いに驚き、首筋から冷水をつぎ入れられるやうに、慄として魂も消ゆるばかり恐しく思ふに、女は猶もピタ〳〵舌打して、さも甘まさうに油を嘗める樣、こわいとも恐しいとも譬へようがない、軈て充分油を嘗め終つたかして、行燈の中から顏を出して口の邊を拭き、女は何に喰はぬ顏して、もし〳〵と搖り起すから、旅人は如何にも今目が覺めた振りして飛び起きあゝ寢過した困つたことをしたと、獨り口の中で呟いて女の止めるのも聞かず急ぎ仕度して其家を飛び出したと云ふ、其後聞けば、女は舌が荒れるもの、夫れを直す爲めに油を塗々して遂に油がすきになつて、つめたい油を飲むより、燈火で温まつたのが飲みよい爲め、行燈の油を嘗めたと云ふ事がわかつた、化物の正體は大低斯んな者である。

●怪物の足跡

羽後の國だが村の名は忘れたが、以前は餘程大きな村であつたそうだが、段々衰へて來て今は見る蔭もない少さな村となつて居るが、此村に一つの小さな寺がある、此寺に或る時不思議な事が起つた、夫れは其村の死人を埋める必ず其晩の中に墓は破られて、死體は何處に行きし者やら、影も形もなくなつて居る、其後死人を埋める毎に必ず死體はなくなる、そこで住僧が苦心して尋ねたけれども、少しも手掛りがないから、其後死人を埋めると、其周圍に火を燃して置いた、夫れでも、火を消して死體を持つて行く、もう今度は仕方がないから、番人を置く事にしたが、夫れでも死體はなくなるから、番人は殘念でたまらず、種々と考へた末死人の周圍に灰をまいて置いて調て見たら、何とも言へぬ怪物の足跡を見付たそうだ、足跡を見付てからは死體は紛失せぬやうになつたそうだ、多分怪鳥の足跡であろうと言ふ事だが信僞は知らない。

●化物屋敷

安永六年秋の頃加賀國は七尾と云ふ處に大野と云ふ一人の俳人があつた、其頃大野氏の屋敷から幽靈が出るとの噂があつた、或る日近所に住む人が御心得までに申上げて置きますが、昨夜用事があつて出ましたら、怪しい火を點した人がゐ邸

の中を彼方此方と歩いて居るのを見ました、隨分た氣をつけなさいましと云ふて歸つていつた、大野氏は世の中に幽靈などあるべき筈はないと、其儘に打ち捨てて置いた、其後三四日過ぎて、或る晩此の家の下女が用事があつて、裏の土藏の前へ行つた、するとアッと云ふて氣絶をして了まつた、此聲を聞きつけて驚いて馳けつけて見た處、下女は俯向になつて倒れて居るので吃驚して顏に水を吹き掛け、藥を含ませなどして呼び生し、一體如何した事かと尋ねて見ると、下女は震

ひながら、云ふには青い火が地の上一尺許りの處をふわ〳〵と行くかと思ふと其後から顏の眞青な何とも云へぬ恐しい人がついてきて私をニラんで彼の薪の中へ這入つて了ひました、あゝ恐しやまだ目の前に見ゐるやうだと云ふので、早速下男等に吩咐けて其薪を取除けて中を改めさせたが何に一つ怪い者は出なかつたそうだ、之れも神經の作用で人が幽靈が出ると云へば、幽靈が目先に見ゐるのである其人の精神次第にて何も見ゐやしない

●出血したる樺

岡山縣の或る處に里屋橋と云ふがある、其橋の下には片葉のよしがある、昔里屋橋の南三町許りの久保村の山上に大きな樺があつた、村民はこれを以つて橋材としようと思ひ、是れを切ると樹身から出血して七日目に倒れた、因つて是れを削り、數多の人夫を以つて是れを運搬しようとしたら、重き事盤石の如く、少しも動かない、因つて村内の美人をして聲を掛けさした處難なく運搬されたそうだ、是れも傳說であるから載せて見たが、僞と思へば腹もたつまい。

●狐火

世間に最も廣く知れ居るのは狐火であろう、狐火は昔から愚人を恐怖せしめた者で、狐が人骨を含んで吐く氣が燃ゐるのだとか、又は狐か持つて居る珠玉が光るのだとか、隨分心持ちの好くない說を云ふた者であるが、精しく觀察して見たら何んでもない事である、凡そ夜は人間の眼の誤り易ひ者であるから、森林の中を提灯つけて行く人が提灯の振り工合で見ゐたり、隱れたりすると、狐が火を消したり點じたりするのだと早合点する人が

あつたり、遠い處の火が近く見ねたりすると狐の火だなと早合点するのである、要するに狐火なる者は人爲的の者で狐火なる者は全くないのである。

●幽靈の御むかい

栃木縣の或る村で隣りの遠い一軒家があつた、其家で九ツになる孫が病氣で床に臥して居た、其處の老母が觀病して居た或る夜若い女が來てのぞいて居るので老母が誰だ〳〵と云ふても返事がない、起きて見たら何も居ない、不思議に思ふて其夜を過したそうだ。夫れから二三日の後、孫は死んだ、二三日過ぎると、前の若い女が死んだ孫をだいて顯はれた、老母は何にしにきたと言へば子持ち女は非常に禮を述べて歸つて行つたが夫れからは顯はれなかつたそうだ、

●山　男

の事を少し話そう、駿河の阿部山中に怪物が居つた、是れを山男と云ふて居た、人でもなければ獸でもなく、形は大きな木を切つたやうな者に四肢があつて、然も二つ大きな目を持つて居た、そうして左の手には藤蔓で作た弓を持ち、右の手には木の枝で造た矢を持つて居た、或る獵師が偶と此山男に出逢た者だから打ち止め、引ずりながら、持つて歸ろうとしたら、岩に體が觸れたら、夥しく血が出たそうだ、驚きながらも又力を出して牽ふとしても今度は非常に重くなつて少しも動かない、獵師は急いて家に歸り、今度は大勢して其の山男の死體を搜したけれど、血が流れて居る丈けで怪物は何處へ行つたか形も影も見ねなかつたと云ふ事だ。

●山　女

日向飫肥の山中で一つの怪物を打ち取つた者がある、此怪物は身體が女の形であつて色は白く、黑髮を振り乱して眞裸であつたそうだ、一寸見ると人間に似て居たが、實は人間ではないのだ、獵師は此怪物を打ち止めてより、非常に驚き、或る人に尋ねて見た處が、之れは山の神に違ひないと言ふから獵師は驚いて、祟りでもなけりや好いがと心配して居たそうだが、別に何の祟りもなく、腐てしまつたと云ふ事であるが斯の如き者のある筈はないから、何れ物ずきが作り出した話

であろう。

●龍宮城

羽前國西村山郡柴橋村を流れて居る最上川がある、此村の渡場を下る事一丁許の處に岩花と云ふ處に臺場がある、此臺場の近傍には三四尺位の大鮒鯉が二三十尾浮いたり、沈んだり餘念なく戯れて遊んで居る、此噂が近郷へ聞へて態々尋ねて見にくるが、二度と見にくる者がない程凄いそうだ、若者が網を引いたりすると必ず一人は死ぬそうだ、此處には昔から龍宮城があると云ふて居る、人が死ぬのも其祟りだと云ふ說だか如何にも怪い者だ。

●姨捨山の由來

昔は五十の坂を越ゑた老媼はきつと此姨捨山へ捨てられた者だそうな、然し是れも土地の習慣となつて居たから仕方がない、處が或る處に孝行者があつて、其母が齡六十の坂にかゝつたので、捨てねばならぬやうになつたが孝行者、親を捨てる事が出來ない、竟に意を決し、一室に隱して日々孝養して居つた、斯かる程に時の太守は孝行者に命じて燒繩を造らしめた、孝行者は其方法を知らぬ故竊に是を母に尋ねたそうだ、すると母は繩を鹽水に浸して後之れを燒いて見よと敎へたそうだ、孝行者直に試みたるに上等の燒繩が出來た、早速之れを太守の前へ差出すと、太守は大いに悅び、其製造の方法を尋ねられたから、精しく其顚末を申上じに太守は大いに悅ばれ、夫れ以後は姨を捨てぬ嚴命を下されたそうだ、姨捨山は、信濃にあるが、之れは造り咄であるから信じてはならぬ。

●人魚

人魚は日本海なぞに澤山の棲んで居ると云ふ者があるが、人の噂のみで實際見た者はありやしない、所謂香具師的の者許りである、現に東京淺草珍世界にある人魚は、上部人身の如く見ゆるのは摸造の人骨で下部魚の乾製に接き合し、處々に毛を附けた者である、

●猫化

猫は年を經ると化けると世の迷信者は思ふて居るようである、が猫が化けてたまる者か、昔は隨分猫騷動もあつたやうだ又今でも猫を殺すと七代祟るとか言ふて

恐れて居る、斯の如き馬鹿氣た事を信にして居る者こそ、哀れな者だ、是れに就て面白い話がある、昔越後の或る侍の家に不思議な事があつて夜になると、火の玉が疊の上を轉けて居る、是れを追ひかけると逃げて行き、隣家の榎の木に登つて行くじやないか、夫れが毎夜繰返されるので恐しながら、毎夜見に行く者もあつた、又其家では人も居ない處で糸繰車が廻つたり、東に置いた道具が西へいつたり、するので恐しい事に思つて、加持祈禱などをして貰つても、少しも効がない、此家の主人は剛氣の侍であつたから少しも苦にもせなんだが、何しろ評判が廣まつて居るから、面白くない、如何して正體を見顯してやりたい者だと、常に心掛けて居りました、或る日何心なく庭へ出て見ると、世にも稀れなる大古猫が赤い手拭をかぶり、後足で立つて四方を眺めて居るので、さては此古猫め毎夜の所業は已れであつたかと、直に鐵砲を取り出し、覘を定めて一發ズドンとやつた覘ひは違はず見事に當つた、猫は苦んで死んで了まつた、それから引下して見たら身の丈け五尺もあつたそうだ、其後火も見えなくなり、不思議な事もなくなつたそうだ、斯んな事も實際作り話てあるから信用して貰つては困るけれど、少し面白い話であるから載せる事にした。

●怪火

福島縣に信夫山と云ふ山がある、明治維新少し前に怖しき奇譚があつた、信夫山の頂に羽黒神社がある、靈驗ありなど傳へて諸國より參詣の人日々絶えない、信夫山に相對して湯殿山かある、杉松檜鬱蒼として晝猶暗く、風景が頗る好い、其當時此村は戸數僅かに百五十戸許り、或る時村人が薪を拾いに行きたが、一日は愚か三日四日と過ぎても歸りてこない、捜かしに人をやれば皆歸りて來ない、人々等は狼にでも喰はれた者であろうと、恐怖して外出する者がなくなつた、其後五日を過きた頃に、信夫山の山腹に怪しい火が、此所に二ヶ所彼所に三ヶ所と燃え出した、村人驚いて多人數が集つて消うとしたが消えない、七日目に至りて何時とはなしに火は消えた、村人等燒跡へ行つて見れば驚くべし、大なる百足が燒

け死んて居たそうだ、是れは百足が餘り人畜を害するので神の怒に觸れ燒き殺されたのだと云ふ事だ、是も例に依て作り話しであるから、其積りて居て貰ひたい。

●狸の惡戯

昔或る處に醬油を家業として居る大家があつた、何むろ大家の事であるから、大豆を數百石常に貯へてあつたので其大豆を喰ひに椽の下に居る狸が夜が更けると喰ひに來るが家内の者は別に之れを怪まずに居つた、或年の事主人は短冊を出して歌をかき、床に据へて之を眺めて居たら、親しき友人が誘ひに來たから、誘はるゝ儘に友人の家に行き、其夜は宿りて翌朝歸り來りて見れば、折角昨日寫した短冊が何物の所業が、めちや〳〵に破つてあるから大いに腹を立て、種々と家内の者や、雇人を詮議して見たが、一向知れない、此事があつてから、二三日の後主人は又句を寫して机の上に置いた、翌朝になると、又散々に破つてある、再度の惡戯に主人は益々怒り、之れは必ず小僧のした事に違ひないと、散々に叱り飛したそうな、小僧はまだ年こそいかぬが、

自分がした事でもないのに、叱られては堪らないから、大いに憤慨して、今にみて居れ必ず惡戯者を搜し出して見せようと日夜獨りて苦心していた、そして考へるには、紙を破る奴なれば又破りに來るに違ひないと机の上へ他の紙を置いて、唐紙の隙より覗ひて居た、斯る事があるとも知らず、此家に居る古狸が、机の傍へきて又紙を破りだした、小僧は大いに悅ひ思はず萬歳々々と笑をふくみ、直に主人に告けると、主人も不思議に思つて、此先何をするであろうと見て居ると、軈て古狸はポンポコ〳〵と腹鼓を打ち出した、紙の裂を見てはまたポンポコ〳〵をやつて居る、主人も餘り面白さに暫く見て居ると、軈て腹鼓もやめて緣の下へはいつていつたそうだ、之れが爲め小僧も青天白日の身となつた。

●馬の化

下總印幡郡の或る村に時の領主堀田公の馬が放飼にしてある原があつた、或時馬盗人が其處の種馬を盗んだ、サア騷がしくなつてきたから、馬盗人は是れではならぬ見付けられては大變と、近く山に大

きな穴を堀つて馬を生埋めにしてしまつた、そして其上へ枯松葉を載せて知れぬやうにしてだいた、が氣になるので七日目にいつて見たら、馬が生きて居るのでもあるまいが、まだ枯葉や地面が動いて居るから、驚いて家に歸りたら其晩から病氣になつた、其後此山から火の玉が飛んできて、病氣で寢て居る處に落ちて、燒け死んでしまつたそうだ、隨分奇譚ではないか。

●胡麻と豌豆を喰はぬ

信濃上田町の西に群山と云ふ處がある、

其處より三里許り奥に野倉と云ふ三十戸許りの小さな村がある、此村では胡麻と豌豆とは決して喰はぬそうだ、是れには頗る面白い話がある、德川三代將軍の頃に、何處の者とも知れぬが白髮の老翁がやつてきて、此村に庵を定めた、所が此老人は一寸不思議な事には胡麻と豌豆の外何に一物を喰はなんだそうな、そして此老人なか〳〵の智者であつて、何を聞いても知らぬと言ふ事がない、そして親切に教えてくれたそうだから、土地の者はまるで神樣のやうして尊敬して居る、所が此老人自分の食料にする爲め、豌豆に手入れをして居た、が何分にも九十一歳と云ふ年であつたから、豌豆の蔓に足を掛けて倒れた、其途端、傍に積み重ねてあつた胡麻の莖でイヤと云ふ程目玉をついた、が、其傷が基となつて、數日の後遂に黄泉の客となつてしまつた、村の人は泣きかなしんだが仕方がない、泣き泣き野邊の送りをすまし、村端れに神樣としてまつり、そして此村では豌豆と胡麻を食はぬ事とした、尤も作りもせぬそうだ、昔はこんな馬鹿げた事をして悦んで居た者だ。

●蟇（ガマ）の不思議

備前國岡山侯の藩中に某と云ふ七歳になる小供があつた、此小供至て身體强壯にて常に病氣などやつた事がない、然るに或る夜急に熱が出て、アッと泣き出すかと思へばパッタリ泣きが止み、泣きが止まつたと思へば又アッと泣き出すので家内の者は大いに驚き、醫師を呼ぶやら藥を飲ましたりして種々手當をして見たが一向きゝめがない、父母は非常に心配して居つた、處が裏の障子に青い火が寫つ

た、ハテ不思議な事と思ひ、直に障子を開けて見たが、其時は最早火は消えて了つた、さては眼の所爲であつたか、と障子を締めようとする時、パッと許りに又燃えて土藏の壁に青く寫つた、是れは不思議と見つめて居ると、又消えて了まつた、消えたと思ふと又パット青い火が出る、其途端奥の間に寢かしてある小供が泣き出す、火が消えると泣きが止む、度々繰返して居る、其度毎に泣いたり、止んだりする、フーム、是れには何か原因がなくてはならぬと、素より武士の事であるから少しも恐しいなどゝは思はぬから、急いて燈火を點けて青い火の燃え出す處の土藏の傍へ行て見ると、晝の間に少年が惡戯に爲たのであろう、小石で石塔のやうな者が建てゝあり、たまけに草花までさしてある、面白い事がしてあると、夫れを堀り返して見ると、こわ如何に大きな引き蛙か一匹飛び出した、好く改めて見ると、五六寸もあろうと云ふ釘が胴に突き通してあつて、苦んで居るから、直に其釘を拔き取つてやつて、然も有り合せの傷藥まで塗つてやつた、墓は

嬉しそうに飛び去つた、さて座敷へ歸つて見ると、怪火も出なくなり小供の泣き聲も止んでしまつた、そして熱も漸々と引いていつたそうだ、後で此小供に此惡戯をしたのは誰であると聞けば、矢張此小供であつたそうな、自業自得で死んでも仕方がない、夫れを早くも父に見付て貰つた爲め、原因も知れて、病氣も癒つた。

●ガヲロ淵の不思議

昔或る村に甚作と云ふ百姓が住んで居つた、或日馬肥を出さうと思ふて、馬を川の側の野に放つて居いた、馬は何氣なく草を食つて居た、向ひ岸はうづまいて深ひ、淵から人とも獸とも分らぬ者がやつて來て、馬の引き網を取て淵の方へ引いて行き、將に川へ飛込もうとした、馬は驚いて、一目散に家へ逃げ歸つた、甚作何事だろうと視ると、一匹のガヲロが網の先に縛られた儘、緣の下に隱れて居る甚作已れと棒で叩きつけた、そしたら謝して曰く、今後あなたが魚が入用の時は淵へ魚籠を入れてくれたら魚を澤山やると、云ふて謝して行つた、其後甚作が魚

の入用の時魚籠を入れると、魚が然も一杯はいてくるから大悦びて居つた、其後魚籠が破れたから、新しいのと取換へたそうだが、それからわ一尾も取れなんだそうな、是れも例の架空談と思ふて居たらよかろう。

●獺（カワウソ）の化物

天明年間に羽前鶴岡上肴町に髪結を業として居る家があつた、或る時病氣で其妻が死んだ、夫れから七日目の晩から毎夜其亡靈が出るので祈禱や加持をやつたが少しも効がない、或る人の話に聞いて見ると、子を孕んだ獺が死人の沐浴た湯を飲むと、屹度化けると云ふから、殊によつたら獺が其湯を飲んだのではなかろうかと言ふ、そしたら如何したらよいと聞いて見ると、夫れは家の入口に灰を蒔いて置いて、獺の足跡を見れば、それで來なくなると敎へてぐれた、髪結の家では早速灰を蒔いて見たら、翌朝果して獺の足跡があつたそうだ、夫れから其翌晩からは亡魂も出なけりや、足跡もつかぬやうになつたそうな。

◉萬物 **製法秘術寶典**

正價 拾八錢 郵便切手又は振替貯金なれば郵稅共貳拾貳錢 郵稅 二錢

掲載目錄あらまし、●紙石盤製造法●器械不用早取寫眞術●器械不用鮮明早印刷法●輕便電氣燈製造法●古唐縮緬をフランチルにする法●上等靴墨製造法●ノミ取粉製造法●鍍金法●銀鍍金物色揚げ法●香水製造法●鼠取藥製法●齒磨製法●白粉製法●リスリン製法●洗粉製法●蠅取藥の製法●線香花火製法●簡便電話機●獅癇玉製法●焙出しの製法●味噌製造法●蜜柑にてジャムを製する法●櫻桃酒醸造法●白髮染の製法●燒酎の醉ひを治する法●衣服のシミを落す法●麥藁帽子の掃除●鐵氣を拔く法●鐵類の錆を取る法●紙革製法●灰汁にて石鹼を製する法●赤、黑、青、綠等のインキの製法●輕便ラムネ製法●リモナーデの製造法●清酒倍增德用法●酒きらいになる法●酒の糟にて酢を製する法●滋養酒製造法●甘露水製法●養老酒製法●蜜柑酒製法●懷中醬油製法●懷中ラムオの製法●凍豆腐の製造法●甘酒製造法●單舍利別の製造法●ペンキ製法●牛肉ソツプの製法●油虫を驅除する法●朱肉製法●木材面を金屬質とする法●簡便晴雨計の製法●檻裾より藍を脫く法●馬鈴薯にて味噌を造る法●耐火布製造法●摸造象牙パイプ製法●德用擬煙草の製法●生徒用習字版の製法●飯の早たき三德法●大有益白油製法●木磨紙の製法●金屬磨紙の製法●水彩畫繪具製法●アラビヤゴム簡易製法●魚膠製造法●烏賊にて醬油製する法●澁柿より砂糖を製する法●味噌の損じたるを直す法●茄子を新鮮に貯ふる法●青梅を久しく貯ふる法●ジンジャエル製法●夏蜜柑皮利用法●苦參利用法●外國ます、はかり、分量●其他奏効確實利益莫大なる諸種の製造法がまだまだ澤山かいてあるのである、一つ覺へても慥に貳拾錢位のねうちはある、それに澤山覺へたら是れ程安い者はあるまい、事業難、生活難職業の撰擇須らく本書を繙かば益する處多大なるは今更喋々するまでもあるまい。◉此書中にあるは熟練もいらずすぐ薄い箱一つあれば紙でも文字でも大小の差別なく思ふ儘に印刷が出來るのであるから名刺引札其他百枚や二百枚位の者を印刷するには誠に便利な者であります、

發賣元 三重縣桑名矢田磧 **弘報館**（振替貯金口座番號東京第壹六九壹八番）

人間一代 運勢便覽

定價十四錢 郵稅二錢
郵便切手又ハ振替貯金ナレバ郵稅共十八錢

人間一代の内には如何なる人にても其人の生れし年々に依り、運勢の吉き時と凶き年のある者であるから、運勢の好き時は何事を始めても大當りで商家や相場師は直に大福長者となり、月給取りは思はぬ成功をする者であるが、是れに反して運勢の凶い年は何事を始めても失敗許りして居る事は諸君御承知であろう、そんな年には何事も控目にせねばならん、然るに運勢の向ひて居る年でありながら運勢の向ひ居る事を知らずして儲かる金を儲けぬと居る人や好き月給取の口がありても考へて居る人が世間にはいくらもある、實に氣の毒な次第である、だから本書を著した譯であるから諸君も一冊御求めになり、何年は運が凶いから控目にせねばならぬ、何年は運が好いから活動せねばならぬと云ふ事を常に心懸けて居られたならば大成功、大富豪疑ひなし、望みの儘であるから諸子も常に座右にそなへ轉ばぬ先の杖とせられたならば著者は望外のである。

行所 三重縣桑名矢田磧 弘報館

明治四十二年七月一日印刷
明治四十二年七月五日發行

三重縣桑名郡桑名町大字矢田磧七番屋敷
著作兼發行者 山田貞夫

全縣伊勢國四日市市新丁百九十八番屋敷
印刷者 加藤幸延

全縣全國四日市市新丁貳百卅四番屋敷
印刷所 三重印刷所 電話百十七番

三重縣桑名郡桑名町大字矢田磧七番屋敷
發賣所 弘報館
（振替貯金口座東京第壹六九貳八番）

◉特別廣告

左記の種子類は弊店園藝部に於て採種せる者なれば、發芽確實なり、希望者は一袋四錢の割にて四袋以上なれば販賣す、然して郵稅は弊店にて負擔す四袋即ち拾六錢以下は御斷り申上候、十袋以上なれば一袋參錢の割とす。

●清國三尺胡瓜●五寸莖大豌豆●五尺サヤ、グ●白菜●体菜●シンキク●除虫菊●米國紫けし●筑羽根艸●玉不留行●金鷄草●金仙花●ヂキタリス●フヨー●美女櫻●ヒヤブキ●櫻草●カンナ●善光寺●庭石菖●矢車草●コスモス●白花月見草●黄花月見草●ビラン●春雨●菊狀昌葵●鳳仙花●白花夕顔●石竹●金蓮花●小判草●三色スミレ●黄色スミレ●スターフロック●百日草●千代萩●鴛草●小町櫻●虞美人草●翠菊●朝顔●晝顔●ガアラーヤ●オダマキ●紫花アザミ●桔梗●カンヂタフト●麝香葵●其他尚澤山有之候。

◉草花は春季、秋季共播種差閊へ無之候。

◉品名御指定なき御注文は左の通り割引致候

◉春蒔 草花種子 十袋貳拾錢 廿袋參拾錢

◉秋蒔 草花種子 十袋貳拾錢 廿袋參拾錢

◉種子は左記宛名にて注文を乞ふ

三重縣桑名矢田磧 山田貞夫

花の如き美人を黑顏醜婦に變せしむる法

婦人の愛する者は「れしろい」である事は皆さん御承知であろう、だから此「れしろい」を塗て居る婦人を本人が氣付ぬ樣に藥品の作用を以て黑顏にしてやるのだ、其筈或る物を持つて行きて婦人の顏面に塗るのと違ひ或る藥品と二種混合して婦人の居る室内に或る藥品を少しでも「れしろい」を塗て通れば其處を畫けば其顏になるのである、（黑顏になりても水で洗へば元の顏になる）或る人の話に聞けば數十人集りの酒宴を開き其席へ藝妓數名を招き大々的愉快の最中一人の惡戯者があり竊に此二種合した藥を小さき瓶に入れて持ち行き瓶の栓を取て置いたから堪らない忽ち其場に居る藝妓數名墨でも塗つた樣に顏から首筋一面にマックロになつてまるで化物同樣だから堪らないて一場の者がビックリして酒の醉も一時に醒めたと言ふ事がある何んと愉快ではないか、此の藥の製造法が覺へたき人は郵便切手十二錢又振替なれば十三錢御送りなさいならば精しく書いてある傳授書を送ります、皆さんも此法を覺へても是を濫用して世の美少婦人を辱めてはいけない、又藥品が買へん土地は本館より送る。

2A-17

◉御注文品は前金の外一切御送り申さず候　◉郵券代用は必ず一割増

簡易素人治療法

郵便切手又は振替貯金なれば郵税共二十錢

定價十六錢
郵税二錢

目録大要、醫藥なくして病氣を治する法●感冒豫防法●感冒簡易療法●感冒熱驅除法●婦人月經なき時の療法●子宮諸病治法●子宮病内服藥の製法●子宮病洗滌法●婦人陰部諸病の療法●月經不順の豫防及ひ療法●出産の月日を知る法●男女陰部諸病の療法●男女陰部の疵を治する法●梅毒の根を絶つ法●大便の通じを好くする法●癩病ヨカチ治法●肺病豫防法●肺病治法●虎列刺豫防法●冒病治す法●ニキビ治す法●アセボを治する法●痔治療法●耳だれを治する法●頭痛を治する法●サメハダを治する法●ワキガを治する法●眠れる藥の製法●ヤケトの即治法●口の臭きを治する法●オコリを落する法●乳房の痛みを治する法●シャックリを治する法●ホクロを拔く法●胎毒、瘡毒を治する法●小兒諸病の治法●鼻血を止める法●腹痛事出來ざる時能く眠れる藥の製法●コブラガイリを治す法●イボを落す法●目藥の製法●足勞を治する法●天然痘痕を治する法●白髮を治する法●毛を濃くする法●齒痛を即座に治する法●拔毛を止める法●酒の醉を即座に醒する法●瘋病豫防法●其他野菜や果物を藥用にする法●蛭に嚙まれたる時の療法●カクラン治法●凍腫の必治法●ウルシかぶれを治する法●チゴト、イビキを止める法●毛を必ず生する法●虱を即座に治する法●鳥目を治する法●身の長を伸する法●蚤に嚙まれたる時の療法が數十件記載してあるが、各自座右に備へ置かれて高價なる醫藥又は何時調合したか譯も解らぬ賣藥によらずして、手輕に安價にて自宅にて治療する事が出來るから、夜分不時の病氣、又は醫士に遠き場所に住まれる人に益する事が尠くあるまいと思ふ。

發賣元

三重縣桑名矢田磧　弘報館

（振替貯金口座東京第壹六九貳八番）

◉注意　御尋ね候有之候は、三錢切手一枚封入又は往復ハガキにて御照會被下度然らざれば如何なる理由ある御返事申さず候也

拔用は郵便で切手方然る切御もしへ手
御もしへ又
存送く
じ中振は
な約者持
き矢金
人すく
ばに
ばるる
人に
は最
郵心
郵での
郵秘
便し注
文は
局く
に書
て留
郵郵
便
郵
終
尋
候
ら
な
れ同
は
除
く
送
外
全
し
途
中
に
通
信
紛
失
致
し
料
恐
れ
ま
す
付
、
非
常
に
故
障
を
來
す
場
合
あ
り
振替貯金利子の德者

諸國奇譚集

弘報館

国立国会図書館

027333-000-1

特52-388

諸国奇譚集

山田 貞夫／著

M42

ADJ-0087